24 室保存用
年少労働者務資料
88-4 NO.35

勤労青少年育成指導者の役割と課題

（昭和49年度勤労青少年福祉シンポジウム記録）

労働省婦人少年局
49.11月

はじめに

勤労青少年福祉のより一層の増進を図るためには、優秀な勤労青少年育成指導者を養成し、確保することが必要である。このため労働省婦人少年局では毎年勤労青少年ホーム館長等、全国の勤労青少年育成関係者を対象として、勤労青少年の健全育成に関し、当面する諸問題について総合的に研究討議を行う勤労青少年福祉シンポジウムを開催している。昭和四九年度は一一月二八日、全国勤労青少年会館（サンプラザ）において全国から約三〇〇人の参加者を得て開かれ、午前中は森山婦人少年局長の開会のことば、大久保労働大臣のあいさつのあと、評論家村松剛氏の「現代社会と青年」と題する記念講演があり、一同感銘深く拝聴した。午後の「勤労青少年育成指導者の役割と課題」と題するシンポジウムは講師、参加者が一体となって熱心にすすめられた。ここに研究討議を要約して関係者の参考に供するとともに、よりよき明日へのつみ重ねのよりどころともなるようにと考えて作成した。特別講演については講師の御都合により残念ながらその要約掲載が不可能となり割愛せざるを得なかった。御了承を乞う。

昭和五〇年二月

労働省婦人少年局

目次

頁

一、労働大臣あいさつ …… 1

二、研究討議

「勤労青少年育成指導者の役割と課題」 …… 2

◎各講師の意見発表 …… 3

㈠ 勤労青少年の余暇の実態 …… 3

㈡ 勤労青少年の意識・悩み への対応 …… 5

㈢ 勤労青少年のグループ活動の意義と指導者の役割 …… 7

㈣ 地域社会における勤労青少年ホームの役割 …… 10

◎全体討議 …… 14

労働大臣あいさつ

本日、勤労青少年福祉シンポジウムが開催されるにあたり、平素、勤労青少年の育成指導のために御活躍されている皆さんの御努力に対し、敬意と感謝をもって、一言御挨拶を申し上げます。

現在、わが国の経済状勢は、非常にきびしいものがありますが、労働行政は、従来にも増して、人間尊重、福祉優先の政策をすすめていくことが、きわめて大切であると考えます。

とくに、全国一千万人を数える勤労青少年につきましては、あすの社会および産業をになうものとして、その健全な成長と福祉の増進をはかることは重要な課題であります。

勤労青少年の現状をみるとき、賃金水準の上昇等労働条件はかなり改善されてまいりましたが、職場適応の問題、なかんずく働きがいの問題や、労働時間の短縮等によって増大する余暇の問題等が注目されてきているところであります。

労働省といたしましては、かねてから勤労青少年ホームの設置等、勤労青少年の福祉の増進に努めてまいりましたが、勤労青少年福祉法の制定以来、関係者の皆さんの御努力により、勤労青少年福祉行政は著しい進展をみており、とりわけ、地域における福祉対策の拠点とも申すことのできる勤労青少年ホームの設置数は増加し、その活動にはめざましいものがあります。また、職場内における勤労青少年福祉推進者制度や、中小企業団体の中における年少労働者福祉員制度も着々と、その成果をおさめているところでありまして御同慶に存ずる次第であります。

これらの施設や制度の機能を十分に発揮するには、指導者の方々に負うところがきわめて大きいと申せます。勤労青少年は心身の成長過程にあるだけに、その育成にあたる指導者の方々は、ゆたかな人間性とともに、専門的な知識や技術が要請されるのであります。

この勤労青少年福祉シンポジウムは、全国各地で、勤労青少年の育成指導のために活躍されている方々が一同に会され、研究討議が行われる年一回の機会であります。意義深い成果をおさめられ、それぞれの場所に戻られましてますます御活躍されることを心から期待いたしまして、私の挨拶といたします。

昭和四十九年十一月二十八日

労働大臣　大久保武雄

勤労青少年育成指導者の役割と課題

司会　読売新聞社論説委員　加藤地三
講師　東京大学教授　江橋慎四郎
東京YMCA総主事　斉藤総衛
千葉大学助教授　鈴木春男
全国勤労青少年会館相談課長　松本知次郎
富士勤労青少年ホーム館長　荻野博章

加藤（司会）　本日のテーマは「勤労青少年育成指導者の役割と課題」で、特に余暇活動を中心にして指導者の役割あるいは課題をとらえてみたい。これから五人の先生方に話をして頂きますが考えてみるに、指導者の役割というのは大変むずかしい。ここに集まっていらっしゃる方を拝見しますと私よりも年をとったような方もいらっしゃいますし、大分若い方もいらっしゃるようです。私ども年配の者から指導者の役割などということを考えると、指導理念を持ち、目標をはっきりつかまえ、青少年についてこいというような形でわれわれも若い時に指導を受けたし、そういう作られた指導というか、上から下へおろす形の指導というものが日本の社会の一つの典型的なパターンになっているのではないかと思う。しかし、私はよく、青少年の集まりとか労組の青年婦人部や会社の青少年関係の指導者の集まりなどに伺うことがありますが、そのような時に「どうも最近の青少年とわれわれ指導者の間の意識の断絶が気になり、旗を振ってもついてこない、どうしたらついてくるのだろうか」というような話をよく聞く。

考えますと、今の青少年というのは、多様化し、グループの中で行動する顔と、一人一人になった時の顔とずい分違う顔を持っている。グループに集まりたいと思いながら一方では一人になりたいという要求を持つわけで、その時われわれ指導者はともするとグループ指導のことだけに気を奪われ、一人一人の青年が何を考えているか、どういう悩みを持っているか、何を不安に思っているかというようなことについてはあまり深刻に考えない。いまの学生運動をみてみますと多様化の極限といいますか、だんだん群れから離れて一人一人になるというような傾向もうかがわれ、勤労青少年の場合にもグループはだんだん小さくなる傾向にある。しかも官製というかフォーマルな指導を好まない。それから会社単位のグループというものにも抵抗を感ずる。そこから離れて自分たちで考えた価値を追求していきたいというような意識構造を持っているのではないかと思う。このような青年の変化にわれわれ指導者は如何に対応していっ

たらいいかというようなところにこれからの指導者の課題というものがひそんでいるように私は思う。

これから講師の先生方に最初に一〇分ぐらいずつ話をしていただくわけですが、最初に東京大学の江橋先生から「勤労青少年の余暇の実態」について話しをしていただきたい。

各講師の意見発表

◎ 勤労青少年の余暇の実態

江橋 今日の若者の余暇生活の現状と問題点あるいは特色というようなことを申し上げることになっておりますが、若干勝手なことを言わしていただくことをお許しいたときたい。昨年総理府から「世界の青年の意識調査」というものが出ましたが、その中で余暇に関して世界各国の青少年と日本の青少年とを比較し、その特徴をとらえているものがあります。

これを引用しますと、まず第一に、日本の青少年の場合には余暇活動の種目が比較的限定されている。余暇活動というのは多様であるべきであるにかかわらず大変限定されたものにしか余暇活動を持っていない。二つ目には、暇があったら、テレビを見てすごす。これは青少年ばかりではなく、わが国では子供から老人にいたるまでが余暇をこういうテレビの視聴ですごすというのが圧倒的に多いわけで青少年だけの特色ではなく、日本人の余暇のすごし方の一つの大きな特色である。三つ目は、余暇生活というのは個人で余暇をすごす場面と、グループ、仲間で余暇をすごす場面と両方あるわけですけれども、これも諸外国の青少年と比較すると日本の青少年は比較的に個人ですごす余暇活動を多くしているということが特色である。

まだ二、三あげることができますが、その他性別とか年令によっても特色があり、簡単に言いきることは出来ないがこれでいいのだろうか、あるいはこの特色を変えることは可能なのかということを考えてみる必要があるのではないか。一方、わが国の大都市に居住する独身の勤労青少年の消費動向調査を経済企画庁が毎年二回やっておりますが、これは別に余暇活動の調査ではなく、どういう面にどのような消費をしているかという純粋に消費動向をみる調査ではありますが、その中で今日の働く独身の青少年の、するレジャー、見るレジャーについての調査をしている。

これでみますと、たとえばするレジャーで男子の場合の三大レジャーは、パチンコ、マージャン、ボーリングで年令により多少順位は異なるものの圧倒的に多い。いったいこれでいいのかと思う方もありましょう。もちろん私は外に現われたこのような行動の様式だけで今日の青少年を簡単に判断することは、青少年にとっても迷惑なことでして、なぜそのような行動をするのかということについてのいろんな条件を十分分析した上でともに考えなくてはいけない問題だと思いますが、少なくとも外に現われた行動様式ではこういう特色があるということです。女子の場合には観光旅行が第一番でついでドライブ、ボーリングという順になっている。

次に見るレジャーでは、映画は斜陽になったと言われておりますが男子でも女子でも映画が第一位、これも映画をみることそれ自体について価値判断をしようというわけではないけれど今日の若者の見るレジャーが映画でしかないということは、テレビや映画というように一方的に受身の活用ですごされているということが、特色として出てくるのではないか。このようなところに日本の若者の余暇のすごし方の評価が出てくるのではないかと思う。「これが今日の当然の姿なんだ」ということで見すごしてしまっていいことなのか私どもは今日の若者とともに考えていく必要があるのではないだろうか。

簡単に二つの調査結果からみて今日の若者の余暇のすごし方を即断してしまうことはけっして的をえていないと思うので、あえて言

わさしていただくなら次のような特色をあげることが出来る。まず第一には、今日の若者の余暇のすごし方が遊び志向であるということ　もちろん遊ぶことも大事なことです。私も遊ぶことの価値をしみじみ認めながらみずからも遊んではおりますが、余暇がただ遊ぶことだけにしかない、あるいは楽しみとしての余暇しか持てないという点に関しては、成長・発育の時期にある青少年にとってやや不十分ではないか。もっと自己自身を啓発していくとかあるいは自分の持っている能力を育てていくとか、あるいは自分自身を仕事の場で発揮出来ないならば余暇の場において自分自身の持っている能力を表現するとか、あるいは発揮するとか、そういう場としてレジャーというものを生かすことが出来るのではないかと思う。

第二の特色としては、これは商業娯楽への依存である。マージャン、パチンコ、ボーリングこれすべて商業娯楽機関でして、そのようなところでしかレジャーを持てないということは問題ではないか。今日、こちらへ来る前に日本大学の大学院で学生と話をしてきたのですけれど、そこで学生から「レジャーというのは金銭を消費しなければいけないのではないか。」というような質問があった。わが国の今日の若者の考え方にレジャーというものはお金を使わなければ買えないのだというのが一般的になっているのではないか。このような点も考えなおしてみる必要があるのではないだろうか。

第三の特色としては、自分たちの居住地を中心としての余暇活動が不十分だということ、職場の仲間とはともによく遊ぶわけですが地域社会でその地域の青年とともに、あるいは学生が働く青年とともにというようなこと、あるいは青年が成人とともにというようなことが少ない。もっと居住地を中心とした余暇のすごし方というものを考えていくべきではないだろうか。余暇の世界においてこそ、むしろそれぞれの仕事の枠を離れ、一個の市民として、あるいは一人の地域社会の住民として余暇生活を持つということが、これまた人間の幅を広くするということにもなりうるのではないか。そういう意味からこのような側面というものを、もっと開拓していく必要があるのではなかろうか。

マージャン、パチンコ、ボーリング、さらには競馬、競輪というようなギャンブルもあり、本当に余暇のすごし方にこと欠くことはないわけで、私たちは今日の現状をそのまま認めてしまっていいのか、いや、そうではなくて特に今日の若者の余暇生活というものにもっと別な側面があるのではないかと考えなおしてみることも必要ではないか。よく言われることに、遊びに指導者はいるものかとか、あるいはレジャーというものは本来個人の自由な自発的な自主的な活動であるから、それに対しての世話役や指導者というのは必要ではないという意見があるけれども、いまの日本の青少年が置かれている余暇環境の実際とか、あるいは先に述べたような活動の実態であるとか、青少年との意識のずれがあるといわれているが（これも本当にずれているのか、あるいはわれわれが本来持つべき生活ということに対しての共通的な理解がまだまだ不十分であるからしてそういうふうに意識がずれてしまうのか）、いろいろの問題はあるわけですが、余暇の領域においても今日の若者の考え方とか行動様式とか意識とかそういうものを大事にしながらも、やはりこれでいいのかということで絶えず新たなよりよい余暇生活を設計し、建設していくためにも励ましたりあるいは相談にのったり、あるいは、ある時にはこの青年の持っているいいものを引き出していくというような、援助者というものが必要になってくるのではないか。

余暇の場合には指導ということがらがただ単に技術を指導する、余暇活動についての技を指導するということではなくて、もっと青年の生活全体をながめながら、あるいは考え方いっさいを十分くみ取りながらどういう余

暇生活をお互いに切り開いていくことが可能なのかという道すじをともに考え、あるいは開拓していくことの出来るような指導者がこれからのわが国の余暇時代には必要になってくるのではないかというふうに思う。

◎勤労青少年の意識・悩みへの対応

加藤（司会）　次は松本先生からお願いいたします。

松本　私は勤労青少年会館の窓口からみた若者の悩み、それから、それへの対応のしかた最後に彼らがなにを求めているかというようなことについてお話ししてみたい。この会館は四八年の六月にオープンし、四九年の十月末でちょうど一七か月間たっておりますが、その間、二、八七一件の相談を受付けている。男女とも同数で、このうち約八割が勤労青少年と推定されており、内容は職業に関する問題がいちばん多く、四五％強を数えている。職業にまつわる問題でいかに彼らが悩んでいるかということがうかがわれるわけです。次に相談の窓口からみて彼らがどんなことに悩んでおるかということを考えてみたいと思います。

まず第一は、職業生活に関する問題の中で、特に注目されるものは離転職の問題で悩む者がきわめて多い。さきほど江橋先生に伺いました世界の青年の意識調査からみても、わが国の場合には実に三割近い者が離転職経験をもっている。アメリカはこれが約七割近い。わが国の離転職問題も近年大分増えてきているところからかなり欧米に近い型になってきているということがわかる。労働省の調査によると新規学校卒業者の場合は五年間に約七割の者が離転職を経験しており、この問題は非常にゆゆしい問題です。

次に職業選択期間が非常に長くなってきている。つまり定職につくのに時間が長くかかる。ということは、アルバイトに身をゆだね束縛をきらうという風潮がかなり強く見られ、さらに生きがいを仕事の中に求めたい。この欲求はけっこうなんですが、そのためになかなか腰が定まらないというか、まるで道端の石でも拾うような気持でなにか生きがいはないか、生きがいはないかと追求している。こういった浮動的な生きがい追求派が目立つ。

次に友人関係の問題で、彼らは遊び友だちは持っているものの、本当に心から語り合える友だちというか、そのようなものを欠いているため、非常に孤独な気持を抱いているということが考えられる。グループ活動等に参加したいと思ってもそれの具体的な手がかりが得られないと相談室の窓をたたく者もかなり見受けられる。地域社会でのグループ活動の参加にしろ、あるいは職場にしろ彼らの職場生活というものはかなり白けきっておりますので、なかなかグループへの参加も思うにまかせないという実態がうかがえる次第です。

次に本日の主題である余暇の問題ですが、先生方のおっしゃるようにゴロ寝、テレビ、ショッピング、これがたしかに三大余暇のすごし方で、それに彼らはけっして満足してはいない。反動としてまず彼らが志向するものはスポーツをやりたい、趣味を生かしたいという欲求が非常に強い。次に教養を高めたい、技術習得のチャンスを得たいということで相談にみえる。それから、かなり遊ぶチャンス、時間、お金はあるようですが、それがきわめて下手だ。したがってなにかよい遊びはないか、遊びへの志向、これが一つの悩みの型として現われてきている。

第四番目に、異性との交遊の問題ですが、このことで端的にうかがえるのは、異性同士がお互いに尊重し合うという気持に欠けているということです。相手を単なる道具としか思わない。最近きた例では、とにかく女性はセックスの対象としか見えない。女性を人間として尊重するという気持に欠けている者が散見される。したがって婚約破棄とか離婚問題というものが最近増えている。

第五番目は人生に関する問題です。非常に大きな問題でありますが、いったいわれわれはなんのために生きるのかという生きる目的を見失ない不安を感じている層がある。その根源となるものを考えると、人生というもの、あるいは自分というものに対する無力感、どうせ努力したってだめなんだ、親を見たって会社の上役を見たってあんなにきりきりまいをしていながらあれだけのものかという絶望感というか、どうせやったってあんなものだという気持が弥漫しており、人生に対する努力を欠く。したがって目的もわからない、不安になると、悪循環をくりかえしている。また、社会全般に関する憤りを持っている者も見られ、特に現在の学校教育制度に対する不満、あるいは学歴偏重主義に対する世の風潮、これに対する反発というものを彼らはかなり持っている。その結果、たとえ学歴のある者にしろ、あるいはない者にしろ現状から離脱したいという志向が強い。つまり大きく言うならば脱日本、あるいは脱都会、脱企業というようなことで自然への志向であるとか孤独への志向、そういったような反社会的な動きに走る者が見られるわけです。

このような若者たちを相談の窓口でみるかぎり、三つの生きるタイプがあるように感じとれる。まず第一点は、とにかく、ととことんまで俺は生きがいを求めるんだという生きがい追求派。ところが彼らは生きがいというものに対する認識をやや欠いているのではないかと思う。私どもは生きがいというものは、目的意識を持ちそれの実現に向って努力し、習熟していくそのプロセスの中で得られるものでそれが生きがいではないかと思うが、彼らは実体として何か生きがいというものがあるんだ、それは見つけられるんだ、拾うようにして見つけられるんだ、だから窓口に「生きがいのある仕事をさがしてほしい、私の生きがいはなんでしょうか」という質問になって現われてくる。こういったちょっと型のかわった生きがい追求派です。

第二点は、ややこれは古い言い方ではありますが三無主義ないしは四無主義、たとえば無責任、無気力、無関心ないしは無感動とこういった主義はなお根強く残っているようで、これらが一見価値観の多様化というような言葉で表現されますが、なにをやってもいい、なにをやっても生きていけるんだというような、よく考えればバラエティに富んだ生き方に見えるわけではないか、これは、やや独断のそしりを免がれませんがそんな感じもする。

第三点は、逃脱派、脱組織、脱企業というような浮気派。この三つに、相談窓口に訪れる人は、悩みの根源を置いているのではないかと考える。そして、その底にはやはり意識のひずみがあり、そのひずみを四つに分けて、まず第一は大きな不安ということ。これは人生観にしろあるいはさきほど触れた価値観という問題にしろ、「これでいいんだ」というものがなかなか持ちえない。これはむずかしい問題ではあるがそれに対する不安はもっている。あるいは、「いったい文明とはなんなんだ」というような不安も持っている。

第二は、彼らは非常に観念主義だということ。これは青年期の一つの特色といえるわけで、観念的な追求、なにごとを追求するにも観念的だ。そして頭でばかり考えていて行動力に欠ける。私は行動力に欠ける青年期というものは青年期として価値がないような気がする。一般的に彼らは行動的なように受け取られているが、意外に行動的でない。そういう側面を強く持っている。

第三は主体性を欠いている。これは裏をかえすとものすごい依存心を持っているということです。いままでの経済社会に支えられた物質万能主義、あるいは富みすぎた日本の一つの影響が現われているのではないか。そしてその結果彼らはかなり自己的になっておりエゴイステックだ。

最後に未熟性、総じて言いますならば青年期ですから無理はありませんが未熟であり、

かなり短絡的である。ものの思考や行動が非常にショートしやすい、短絡的で論理的でない。無理からぬ面もありますが、もう少し考えられないものかなあという慨嘆を久しうする場合もあるわけです。そして彼らはいったいなにをこの世の中に求めておるかといいますと、生きることの意味で、これは非常に大きなテーマですが、われわれは一緒に悩んでやらなければならないと思う。そして彼らは生きがいというものは職場に求めたいと考えている。ところが今の職場にはそれが求められない。なぜならば自分の存在価値というものがそこに認められないからだとこう言う。自分の存在価値が認められない職場には自己実現の場がない。だけどやっぱり仕事にしか生きる道はない、ところが仕事は面白くないとこう堂々めぐりをしていて、このような彼らにどうやって生きることの意味をわからしたらいいのかというのが一つのテーマになります。そして、こと職業の問題に関連しますと、彼らは大きく分けて四つの志向を持っている。

まず第一の志向は人間への志向。人に教えたい、つまり教育関係の仕事に就きたい。それから社会福祉の仕事をやりたいという福祉への志向を若い人はずい分持っている。第二は自然への志向。動植物の栽培、飼育あるいは自然国立公園への勤務、あるいは夢みたいな話ですが牧場をやってみたいというようにかなり自然へのあこがれをもっている。第三には創造への志向。つまり美術工芸関係の仕事、あるいは自分の趣味を生かした仕事、こういった志向が強い。それからこれは人間への志向とも重復すると思うが、マスコミへの志向はかなり強い。なぜマスコミへ志向するかということを考えると、社会主義をなんとか貫きたい、正義感をこれにぶっつけて表現してみたいという欲求があり、この根底を流れるものはやはり物質万能主義であったいままでの社会に対する反発ではないか、そこにあらゆる問題がひそんでいるような気がする。

◎ 勤労青少年のグループ活動の意義と指導者の役割

加藤（司会） 次は東京YMCA総主事の斉藤先生からお願いいたします。

斉藤 私はここにおられる多くの方々と同じように青少年のいわゆる社会教育活動と一般的に言われている働きに日常関わりを持っているので私の経験にもとづき、話をすすめてまいりたいと思う。いままでの先生方のお話しや、最近のいろいろの調査結果を拝見し、多少乱暴な言い方になるかもしれないが、いまも昔も青少年はあまり変っていないということを、申せるのではないかと私は思う。いつの時代でも大人にとって青少年はある意味で頭痛の種であり、青少年にとっては大人というものはまことに取り扱いにくいわけのわからない存在であるというのがおそらく歴史の中でいままで多く見られてきたことではなかろうかと思う。

しかし、全く変化がないわけではなく、特に昨今の世の中で際立って私どもの世界を襲っているいくつかの事柄の中から二つの大きい問題と思われる事柄を申し上げたい。一つは、最近、心の支えになる集団がなくなっているのではないかという考え方です。このことは産業革命が人間の歴史を覆い、今日いうところの都市化とか産業化という状況が世界をのみこむようになってから引き続いて起っている一連の社会変化の中で見てとられる傾向で、おそらく近代の持つ最大の課題であろうと思う。ごく簡単にいうならば、新しい産業が生まれ、かって行政、商業の中心であった都市が今日いうところの産業をそのうちに含むようになると、そこにはいつでも膨大な労働力が要求されるわけで、この労働力ははっきりとしたコミュニティーを形成していた主として農村とか山村とか漁村から都会に向って流れ出てくる青少年によって埋められてきた。これはすでに一世紀を超え、二世紀になんなんとする永い人間の歴史の中であらわ

になってきていることで、そこでは青少年が心の支えになるプリミティブな集団から切り離され一人にさせられてしまっているということがあるだろうと思う。

もう一つは比較的最近の現象ですが、いわゆる技術革新が進み、価値大系に大きな変化が起っている。昨日まで持っていた知識が明日役立ちえない領域が人間の世界にたくさん生まれてきている。この二つの事柄だけをとらえてみても、安定の出来ない状況の中に特に若い人たちが生かされていて、いわば仲間が持てない。そこに安心して生きていけないという状況が生まれてきていることが明らかではなかろうかと思う。他方、いま申し上げた事柄の裏側になるが、社会の産業化があらゆる意味で私どもの生き方をシステム化しはじめ、その中で生きがいを見つけようとする若い人たちのあがきを多く見る。ことによるとその中以外には生きがいが見出しえないのではないかという錯覚にまで人を追い込むほどにシステム化、管理化が進んできているのではないかと思う。

その結果として、いままで先生方がお話しになられたように、むしろ生きている世界からとび出していこうとする傾向になり、極端な場合には反体制的な動きに変っていったり、あるいは自らの中にとじこもってしまういわゆる一人ぼっちの傾向を生み出している。これがおそらく最近の際立った一つの傾向ではなかろうか。

しかし、さきほど松本先生がお話し下さいましたように、そういう中できわめて真面目な志向が全体としてなお若い人たちの中に潜在的に存在している。これをどういうふうに引き出していくかということがおそらく私どもに課せられている共通の話題ではなかろうかと考える。最近、このシンポジウムに出ることのおすすめをいただきいくつかのホームを拝見させていただいた。わずかの数ですので私の多くの誤った観察が含まれておるかもしれないが、勤労青少年ホームは、いま申し上げたような青少年を取り扱っている場であるにもかかわらず、あてがいぶちのプログラムが多いように思われる。これほど価値体系が激しく変化し、新しいものが次々に生まれてくる時代に、いわば私どもいくらか現在の青少年より先に生まれた者が受け取ってきた文化的諸価値を、次の世代に伝えていくというような形だけで若い人たちの欲求は満足出来るかどうか、このことを私は大変強く感じている。青少年の持っているいらだち、不安、欲求といったようなものを総合的にとらえあげ、むしろ彼ら自身の手による自発的かつ自律的な小集団の活動が必要なのではなかろうか。多くの方々は施設の維持管理あるいは施設の行事の準備、実施、さらには評価といったようなことにお忙しくいらっしゃることと思う。私はここに施設という言葉の持つある意味を逆に感じる、施設はなんのために存在するのか、施設は施設自身のために存在するのではなく、施設を用いる者のために存在しているというきわめて自明なことであり、どうしても一つの転換が求められるのではなかろうかと感じ、また私自身の戒めにもして拝見させていただいた。

いろいろな資料を拝見しますと、いわゆる施設のサスプロ、施設が提供するところの行事、事業に、施設でお働きになっておられる方々のエネルギーの大半が用いられているように感じられた。これは青少年に対して大変親切なことのようではあるけれども、実は彼らの中に持っている問題に正しく対応している姿ではないのではないか。そしてプログラムはすでに価値ありとして作り上げられた文化的諸価値をあとから来る世代の人たちに伝達するためにお骨折りになっていて、彼ら自身が作り上げたエネルギーを吸収する方向には必ずしも向けられていない。特に多くのクラブ活動の場合にはやや、「どうぞご自由に」という形で存在し、一方では一所懸命にこれに参加しなさいというプログラムを提供され、

彼らが使用をするものについては「どうぞご自由に」という放任主義的なリーダーシップが見られるように感じとられた。

実はこの二つをもう一度見直されて総合されるところに新しい彼ら自身の活動の萌芽があるわけですし、そういうことからグループ活動というものをもう一度とらえ直して、むしろ過去の文化の伝達継承を願うものよりは新しい文化的諸価値を、人間的諸価値を作り上げていくための働きにこのグループ活動というものを取り上げて生かしていくことが必要のように感じられた。特に職業が人生のすべてであると思い込みがちな人々にとって、今日の職場はきわめて苛酷な状況を呈していると思う。その中に人生の自己実現の契機があることは疑いのない事実ではありますが、そこだけではなくて二四時間生きている人生が自分の人生であってそれは相互に作用し合って一人の生きかたを作り上げていくということの確信を少なくとも私どもは持つべきでしようし、そのような形でこのプログラムの適用が進められていくときに余暇活動と呼ばれるものが実は補助的なものでもなければ、職業が面白くないからそれにかかわるものでもなくて、実は相互補完的になければならない存在として理解されてくるのではないか。それをきわめて管理化された社会とは異なった様相で自発的に自律的に進めていくことを促すところにグループ活動の意義があるように思う。

特に施設の職員の方々の役割についてひと言ふた言申し上げますなら、いわゆる指導原理とか指導理念とかいうものをもって指導される以前に、要求されるものは、現在の青少年をあるがままに受容するという目標、受け入れることのできる指導者であるかどうかということへの問いではなかろうかと私は思う。よく歌の文句にもありますが、私ども自身の青少年期をふりかえってみても大体わけのわからんことを言っておったわけですし、いつでも青少年はそういうものなのです。その中にたくさんの可能性があることを信じるがゆえに歴史は動いているという確信をお互いが持って、あるがままの青少年を受け入れながら、その中の可能性を、善意を、願いを生かしていく。これが施設で働く専門の職員に課せられた基本的な課題であろうと思う。グループワークとかグループダイナミックスに関する研鑽はもちろんしていただく必要はあろうと思いますが、すべてにまして青少年を受容出来るかどうか。単に教育の対象としてプラスティックを存在としてこれをどのような形に作り上げていこうかという目で見るのではなくて、彼ら自身がどう生きるかという見方を持つことができるかどうかが専従者への最大の期待であろうと私は思う。

二つ目には放任されている、あるいはあてがいぶちのプログラムを与えていることのいわば狭間にあり、ホームでいうところの利用者の中にひそんでいるリーダーシップをどのように発見し、どのように養成していくかということは大変大きい問題です。いくつかのホームは利用しようとして登録してくる方に対するインタビューをしておられたが、これがいま最大の必要要因ではなかろうかと考える。大体一〇〇〇名前後の登録者に、三名ないし四名のワーカーの方々がおられたなら、インタビューはそれほど困難ではなかろうと思う。松本先生も相談、助言の仕事をなさりながら多くの事実と真実とを生み出されたわけですが、インタビューが彼らをグループに結びつけていく機会になり、彼らの持っている願いを自分自身で確認させるチャンスになる。そういう形でのインタビューをぜひプログラムの中にお入れいただきたい。そして見出されたボランティアのリーダーたちを出来るだけ生かしていくことをお考えいただきたい。

青少年ホームではありませんが、最近公共のある施設をお訪ねし、いろいろなお話をしている間に、「この施設ではボランティアのリーダー諸君がどのように動いておりますか」という質問をした。「実はあまりいない」というご返事で、「なぜでしょう」と重ねての問いに対してその方から、「ボランティアのリーダーは責任がありませんからあまり期待出来ません」というお答えが出て、私は大変な悲しみを持ってその場所を立ち去らざるをえなかった。青少年の仕事をしていきます時、青少年に信頼がなければその中にひそんでいるリーダーシップなどの成長は望むべくもないということをしみじみと思ったわけです。私のここで申し上げたいことは、ぜひ利用者の中からリーダーシップを見出していただきたい。行事やプログラムを進めるためではなくて、利用者すべての中にひそんでいるリーダーシップを見出すという基本的な考え方から出発していただくことが必要ではなかろうかと思う。いずれにしても何名登録しているか、一日の利用者は何名か、というような数で勘定することはいけないのではないか。大切な統計的諸資料ではありますが成熟の過程にある青少年に関わるかぎりそこにいる一人一人が数字に置き換えられることなしに、いわば一人一人の固有の名称を持ち固有の悩みを持ち固有の人生を歩んでいる青年として捉えられるかどうかというところに、実は勤労青少年の指導者の最大の役割がかけられているというふうに私は申し上げたいと思う。

◎ 地域社会における勤労青少年ホームの役割

加藤（司会） 次は千葉大学助教授の鈴木先生にお願いいたします。

鈴木 ここでは中小企業に働く勤労青少年の余暇というものにとって公共的な余暇施設としての勤労青少年ホームの意義がどんなところにあるかというようなことを中心にお話しをすすめてまいりたい。

はじめに勤労青少年ホーム利用者の実態調査を参考にしてデータを分析してみますと、ホーム利用者の人たちの約四割は余暇をかなり楽しんでいるという答えをしているが、残り六割の、いってみれば楽しんでないという人たちに、「いったいどんなところに障害の要因があるのか」ということを尋ねてみたところ、いちばん多かったのはとにかく時間が不足しているという答えで、これは六割のうち約半分にあたり全体では三割位になる。次いで多かったのは「経済的なゆとりがない」、というのが大体一五％位、「仲間がいないのは余暇が十分楽しめない理由だ」とか、「場所がない、施設がない」というような答えは比較的少なかった。

よくよく考えてみると、確かに現状では中小企業の勤労青少年にとって余暇を十分に楽しめない最大の要因は時間であり、あるいは経済的なものであろうと思うが、実はその面はここ数年、あるいはこれから今後何年かにわたってかなり解消されていく面があるのではないか。実証的にアンケートに対して答えるというようなことになると、えてして時間とか余暇とかいうことを答える傾向がありますが、多少ちがった言い方になるかもしれないけれども、これからの障害要因としては、比較的低い回答しかえられなかった仲間の問題だとか、指導者の問題だとか、あるいは経済的要因とも関連する余暇施設の問題とかがクローズアップされてくるのではないか。一方で週休二日制も進み、賃金水準も全体的にみればかなり上がっていくと思う。特に若年労働力の不足している現状の中で少なくとも勤労青少年だけに限って言えば、余暇時間なりあるいは収入なりというものはかなり改善されていく可能性をもっているのではないかと思う。

そのように考えていくと、指導者の問題あるいは施設の問題というのはクローズアップされてくると思うのです。もう一つ別の観点から、余暇というものが企業とどういう関わ

り合いをもつのかということを考えてみたい。余暇は労働のためにあるというような考え方が特に中小企業の経営者の方々に実態調査をすると出てくる。企業が現在行なっている従業員に対する余暇活動をみても、ご存知のとおり中小企業の場合には従業員の慰安旅行というのが圧倒的に多い。この慰安旅行が本当に余暇活動かどうかを考えると、ずい分疑問がある。いってみれば職場の人間関係をよくするために、スムーズに仕事を運営するためにいわば人間関係作りとして慰安旅行というものは行なわれている。中小企業での余暇活動というとまず第一に慰安旅行をあげほぼ一〇〇％に近い。この実態から企業内の余暇というのをみると労働のための余暇になる。

実は、最近の若者たちに企業の行なう余暇に対し反発するというのが出てきており、さきほど申し上げた調査によっても、たとえば「余暇はいったいどういう形の中で充実されるべきか、推進されるべきか」というような質問に対し「企業の力に頼るしかない」という答えは一〇％ぐらいしか出てこない。圧倒的に多いのは「国とか地方自治体、というような公共的な機関にぜひ推進役としてやってもらいたい」というのが多く、五四％となっている。この観点からみると余暇というものは企業とある意味では離れて行なわれるべきものというのではないか。企業から離れて余暇が行なわれるということであるとすれば、施設としてはどんな施設が関連するのだろうか。大きく分けると公共的な余暇施設と商業的な余暇施設ということになろう。ここで、勤労青少年が、どういう場所で余暇活動を行なっているのかを調査からみると大企業の四六％の人は企業内の施設で余暇を楽しみスポーツ関係のサークルやグループ活動の場としている。一方中小企業では四一％の人々が企業内でクラブ活動をやっている。当然のことですが大企業の場合には企業内の施設をもっている割合が高く中小企業は少ないということをうかがえる。では、残りの勤労青少年たちはいったいどこで余暇活動を行なっているのかと尋ねてみますと、公共施設を使っているというのが大企業で四一・七％、中小企業で四〇・六％でほぼ近い比率を示している。ところが問題なのは商業施設を使っているというのが大企業で一五・一％であるのに対し中小企業の場合二三・三％と高い。お金のない中小企業の勤労青少年が企業内で余暇を楽しめないとすれば、一般的には公共余暇施設で楽しむのがいちばん良い方法ではないかと考えられるのに、それが公共余暇施設の利用はわずかながら大企業に多く、中小企業の勤労青少年は商業余暇施設のほうに足が向いている。この点についてはすでに何人かの先生方が中小企業の勤労青少年は商業余暇施設に余暇活動の場をもとめているとの問題点をご指摘なさっていらっしゃるので、私はこれ以上深く突っ込んで考えることを、ここでは省略しますが結論としては、公共的な余暇施設はむしろ中小企業勤労青少年の中に深く根をおろすべきではないかと思う。公共余暇施設がもっと利用されるためには二つほど対策が考えられる。一つは公共的な余暇施設そのものの充実ということ。ためには公共的な余暇施設が地域社会と密着するということ、これはさきほど江橋先生もちょっとご指摘なさっていた問題だと思いますが重要だと思う。勤労青少年ホームの場合には、ホームが自分の庭、自分の家としてその地域に働く人たち、あるいは地域の住民が意識出来るようなものであるべきだ。従って、立派なものが少数あるよりも、むしろ小さいものでもいいから数多くあり、だれでも身近にそれがあるというような形で、公共的な余暇施設は作られていくべきではないかと考える。

もう一つの問題はPRについてである。くわしくお話していくことは時間の関係で出来ないが、中小企業の経営者の理解を深く求めるということが重要ではないか。これに関連し、ホームの利用者と仕事意識の関係という

のを少し分析してみたが、中小企業の経営者には勤労青少年ホームに従業員を行かせると定着性が悪くなるのではないか、他の企業へ移るのではないか、あるいは余暇志向が非常に強くなって困るのではないかというような不安があるようです。しかし勤労青少年ホームの利用者は一般の中小企業労働者に比べると仕事意識が非常に旺盛だという結果がデータの上に出ており、仕事に対する満足度というようなものを比べてみても非常に高い。たとえば中小企業の企業内でクラブ活動をやっているような人たちと、勤労青少年ホームでクラブ活動をやっている人たちとを対比してみると勤労青少年ホームというようなところで企業の枠を離れてクラブ活動をやっている人たちのほうが仕事に対する満足度は高いし、やる気も非常に旺盛であるというようなデータがある。

このようなデータを積極的に経営者のほうにPRし、そして勤労青少年ホームあるいは公共余暇施設で余暇を楽しむことけっして企業にとってマイナスではないんだ、あるいは仕事にとってマイナスではないということをアッピールする必要があろうかと思う。最後に勤労青少年自らの余暇設計ということがあげられるが、これについてはすでにお話しいただいた諸先生方がおっしゃっていらっしゃるので重複すると思いますので、私も同じ意見であるということだけ申し上げ、不十分な点はのちほど補足させていただきたい。

加藤（司会） では最後に富士勤労青少年ホーム館長の荻野先生から今の鈴木先生のテーマと同じテーマで実践されている立場からお願いします。

荻野 私の所属するホームをまな板の上にあげ、みなさんでご批判いただき、それから良いものを得るという形でお話し申し上げたい。

魅力あるホームにするということ、これは施設管理の立場からみて第一の条件です。私、四年前に勤労青少年ホームの館長として赴任し、入った建物の感じが、非常に官庁のようにかたいことが気になり、どうしたら働くヤングたちが気軽に入れる明るい職場になるかということを考えてみた。予算的に制約があるので、まず私は、職員と利用者に相談し、部屋の種々の仕切り一切をとっぱらい、開放的なホームにした。次に光の関係とか配色を考え、明るい色を出すということ。しかしこれも金がないのでいろんなポスターをいろんなところへ自由に貼る。音楽室等へ行くとポスターをさかさに貼ってあったりで形式にはこだわらない。まっすぐ四角に貼るというのがいままでのわれわれの考え方ですが、彼らはそういうことをあまり意識しないで平気でいろんな形に貼る。このような観点から利用率の低い部屋を個々に検討して一つずつ内容を変えてきた。娯楽談話室を例にとると、豪華な部屋ですが、グループで話をする場ではなく、椅子が沢山あって集団見合いの場のようなものであった。かえって椅子を取りのぞいたほうがいいのではないかということでそれを少なくし、ポスター等をかなり貼り、現在社交ダンスやフォークダンス、フリーの立場では音楽を聴いたり、運動の場が少ないから夜はフリーテニスの場として利用している。もちろん、曜日によってプログラムはちがうが一。このようにして娯楽談話室の利用も増えてきた。

次に会議室のように堅い感じで入りにくかったのは図書室でした。これには、娯楽談話室の椅子等を若干入れ、応接セット等もよそから持ってきてゆったり座れるようにし、週刊誌とかいまはやりの週刊マンガとかを入れ気軽に入れるような形にした。その結果、一般図書利用の面もかなり増え、図書会員の数も増えてきた。最近では一般図書も約一五〇〇冊用意出来て彼らの希望する図書等も購入してやることが出来るようになった。

次に考えたことは一階のロビーです。私がはじめて赴任した頃は物置き兼会議室となっ

ていたのを、極立を全部とりはらい利用者と数週間にわたって相談し、喫茶室を作りたいということから丸太造りで作ることとした。利用者の中には種々の特技をもっている者がおり、設計する人もいる。材料は、市に山林があるので、そこから檜丸太を職員が伐ってきて、利用者は夜、皮をむくなどして数週間かけて山小屋ふうの喫茶室を作った。ところが屋掛けが思うにまかせない。私のほうにはご存知のとおり富士川という大きな川があり、そこの河原木の太い丸太を四、五本伐って拾ってきて、チェンソーという大きなのこぎりで伐り、ちょっと焼いて利用した。金がなくても楽しい喫茶室が出来非常に好評です。なおそこにはこたつも入れてある。むしろその場所が娯楽談話室であるというような形に今は利用されている。

なお、この建設途上若者たちの延百数十人の人が自ら手を出してやってくれた。もちろん職員もやったがこの中でいろんな勉強を私たちもしたし彼ら自身もした。喫茶室はグループで運営している。グループの女の子に「毎日ご苦労さん、こんなのが好きなの」と聞いてみたら、彼女から、「私は栄養士でいつも会社の給食室で働いているので友達と話す機会が少ない。ここに来てみんなと話すことがとっても楽しいです」というようなことがかえってきた。これが、われわれが求めているものだと感じた。時間の関係もあり、ロビー等については省かしていただきますがこのように金をかけなくてもみんなの力で施設の内容、イメージをかなり変えることが出来る。

次に指導員の面について、施設運営の可否は、人なりとよくわれわれ自身も感じていることですが、まず指導員としての第一条件は仕事に情熱のある人、やる気のある人、これがなければ施設の運営は出来ないのではないか。われわれが若者たちにいかに生きがいというものを説いてみても、自分自身の生活の中に自信の持てない人が指導員になったらこれはだめだ。出来ればそういう情熱のある人に青年心理とか、面接技術のようなものを勉強してほしいと思う。そして若い人とともに行動出来、ともに語ることの出来るような人が望ましいと思う。ただ館長と若者との間には年令とか考え方にかなりの違いがあり、このギャップを埋めるためにどうしたらいいかということです。私は私のことを彼らに理解してもらうのではなくて、彼らを私が理解するということで裸でとび込んでいますが、それでも若い人たちとのギャップがなかなかうづめることが出来ない。そこで若い指導員をパイプ役にし、直接でなく間接的なアドバイスをしていく。その面についての指導員、いわゆる職員同志の話し合い等はかなりやっている。要は、彼ら若者たちと気軽にあいさつ出来るような人間関係を作りたいということで目下努力している。

第三には職員の勤務体制についてですが、これは大事なことでして、さきほども申し上げたとおり「施設の運営は人なり」と言われるとおり、ホームの三名か五名の職員の犠牲の上にホームが成り立ってはいけない。これを強く申し上げたい。私のホームは一般職員五名と管理人一名の六名で運営している。一般職員五名の中、一名は女子です。休館日は木曜日で日曜日は午後五時までとし、その他の日は朝九時から夜の九時まで開館している。職員の勤務体制は、女子職員一名は八時四五分から一七時まで、私を含んで男子職員四名は、各々二名ずつ八時四五分から一七時まで、一三時から二一時までの勤務とに分けている。

なぜこのようにするか、われわれ職員も人の子です。そしてホーム運営の基本的なものは、ホームの職員が楽しく勤務出来なくてなんで勤労青少年ホームの運営がうまく出来るかという考えからこのような勤務体制をとっているのです。そしてまたこの仕事を続けるには、他の行政職員より以上に家族の協力がなかったら出来ない。せめてそれぞれの家庭において週のうち半分ぐらいは家族と食事

をする機会を持ち、その中で家族の協力も得られる。一方、土曜日に夜まで勤務した分については一か月に二日代休をとるようにしている。日曜日の利用は外での活動が多くホーム内での活動はあまり多くないので、日曜日は交代勤務で一か月のうち少なくとも二日は職員に休んでもらう。

なお今後の問題として週休二日制、職員の処遇、特勤手当の問題等について現在取り組んでいる。

加藤（司会）　これでひとわたり講師の先生方のご発言はすんだのですが、今までのご発表に補足なさりたいことがありましたら伺いたいと思います――――。とくにないようですのでみなさま方からのご質問だとかご意見の間に補足していただくことにし、活潑なご意見なりご質問をいただきたい。

全体討議

○　指導理念について

山田（阿南市立勤労青少年ホーム）　よく言われることに指導員は指導精神を表面に出すと反発をかうので、どちらかというと利用者のほうを主にたてて運用していくようにということがあります。指導というものは、要するにその指導者の青少年に対する愛情いかんによって、そして普段の行ないそのものがそれに値いするだけの自負心があれば青少年はけっこうついてくると思う。さきほどの村松先生のお話にもあったように、どちらかというと導くという精神をもち、自信をもたないと本当の意味の育成は出来ないと思う。勇気をもって堂々とやっていかなければ本当の指導者になれないという信念をもって私はやっている。

加藤（司会）　いまのご意見は指導者が指導理念をどのようにもつかということで、大変重要なご発言だと思う。青少年が何を考えているかということで、オロオロ、オロオロ青少年の回りを見回していたのでは指導者になれないだろう。指導者というのは青少年にとって愛情をもつと同時に指導理念をもって引っぱっていくという精神が必要じゃないかというご意見だったんですが、斉藤先生いかがでしょうか。

斉藤（講師）　今日の時代のリーダーシップというのは大変複雑な形で存在していかなければならないものであると思う。ただいまの御意見のような場面が必ずしもないとは言えないが私は引っぱっていくという立場はとらない。成熟していくべき青少年自身の主体に期待をかけていくことを指導理念としておくべきであって、彼ら自身の成長をむしろ助けていく役割が指導者に期待されている大きい役割であろうと考えたい。

山田（阿南市立勤労青少年ホーム）　表面には出さなくても心は自負をもたないと熱もはいらないし、実際の仕事は中途半端になる。

斉藤（講師）　おっしゃったとおりだと思う。一人の人間が生まれて生きて死んでいくというきわめて厳粛な事実に関わりをもつものがもし指導者であるとするならば、いまおっしゃったような情熱がなければならない。ただ、その人が思うような人間に指導を受ける側の人間がなるべきかどうかということについて私は問題があると思う。

加藤（司会）　只今のご意見に対して講師の先生方ほかにご意見のある方いらっしゃいますか。

萩野（講師）　この問題については、さきほど指導員のところで私は申し上げたつもりですが、個々のケースによってかなりいろんな問題が出てくると思う。実際に経験したケースとしては、一人の天涯孤独の青年から職業をやめたいと真剣な相談をもちこまれ、私は仕事が終った後、家へつれて行き懇々と諭したり怒ったりした。そして「俺はお前の親父か兄貴として真剣に考えている。外へ出ろ、

いまから性根をたたき直してやる」というようなことも言ったりしていたら、ようやくいままでもっている職業をそのまま続けるという気持になったケースがあった。

彼らが求めているものの中に大人が真剣に怒ってほしいというのがある。かなりの若い人たちがそういうことを感じている。

松本（講師）　同じような事ですが、私の場合カウンセラーという立場をもっており、外来者に対し叱ることも批判することも泣くことも原則として許されない。話し合っているうちに彼らがわかってくれる能力をもっているのだという信念をもっている。実際、話し合っているうちに彼らは必ず洞察を得る。その洞察はけっして狂っていない。これを確信してカウンセリングに邁進している。

○　青少年の孤独と人間への志向等について

神奈川県労働福祉課職員　江橋先生と松本先生に関わりあると思いますが――。

江橋先生の意識調査の分析で、いまの日本の青少年の余暇活動というのは一言で言えば能動的であるということですが、能動的ということは個人的に余暇時間をすごすことが多いということだと思う。このことを松本先生のおっしゃったいまの青年の四つの志向、人間への志向、自然への志向、創造への志向、マスコミへの志向、これはおそらく個人では出来ないと思う。このように孤独の面への方向と意識のひずみに現われた四つの志向、これをどのように理解したらいいのでしょうか。

加藤（司会）　江橋先生からお願いします。

江橋（講師）　若干私の言い方が足りなかったようです。種々の調査で日本人の余暇の過ごし方はやや積極的になってきているとか、野外レクリエーション需要が増加してきているとか言われておりますが、諸外国の青少年とわが国の青少年の余暇活動を比較した場合には、テレビを見る、音楽を聞く、ショッピングする。あるいはブラブラして過ごす人の方が多く、能動性に欠ける面が多い。一方、わが国の青少年の余暇のすごし方を一〇年前と今日とを比較すれば確かに積極的、能動的な活動が多くなってきたということは言える。そうは言っても、それを諸外国と比較した場合には、なおわが国のほうが能動性に欠けているのではないかということです。

松本（講師）　青少年は孤独の問題で悩んでいるということをまず申し上げ、しかし彼らはそれが悩みであって孤独を愛するというような状態ではない。友だちがほしいわけです。その友だちは遊び友だちではけっしてなく、心を打ちあけて語れる、古い言葉でいえば刎頸の友というか、刎頸の交わりというか、そのようなものを求めている心には切なるものがある。それはだれでもいいわけではない。やっぱり同志でありたい。自分と同じ方向を志向する者、そこに心の交流があると考えている。そして、そのような友だちと一緒にさきほど述べたような志向性のある職業に入っていきたいとの欲求をもっている。連帯感というものをかなり強くもっている。従ってそこに、たとえば現在の物質社会、あるいはいままでの高度成長の経済社会に対する反発というものがあるのではないか。

更に付言すれば、高度成長の社会の中で意識を形づくってきた若者が、いままさに経済社会が停滞ないし衰退しようとしている中において、彼等の志向性あるいは意識がどのように変化していくのか、どのような抵抗性をもってそこで示されてくるのか、非常な期待をもって私はいま待ち受けている。

加藤（司会）　いまの問題について私からも補足させていただくことを許していただきたい。私自身の青年期を回顧してみると、さきほど出ていた孤独にも二種類あるように思う。「淋しいなあ」「友だちがほしいなあ」というような孤独感というのはグループの中にはいることによって、あるいはすばらしい友だちを得ることによって、あるいは彼女のような異性の友だちを得ることによって、

解消しうる孤独で私もかって体験した。しかしこのような単純な孤独ではなくもっと深い孤独感に陥ることがある。このことにも御留意下さったほうがいいと思う。こういう実存的な孤独感というものは友だちとつきあっていてもあるいはどんなすばらしいグループの中に入っても白けてしまうような深い孤独です。実存的な孤独に陥った青年に「一緒に遊ぼうよ」などと、普通の「俺は淋しいんだ」というような孤独と同じ範疇のものと思って接触すると逃げてしまう。ただ孤独ということ一つ取り上げてもその中にはいろいろな孤独があるので単純な接し方では大変危険だと思う。

私の経験から、「人生はなにか」というような疑問から発した実存的な孤独を克服するためには、やはり一人ぼっちにしておかなければいけないと思う。したがって「一人ぼっちよさようなら」というようなスローガンだけでは本当の孤独というのは癒やされない。

小口（岡谷市勤労青少年ホーム）　鈴木先生から、さきほど統計の上で、中小企業の勤労青少年には公共施設を利用するものが少ないという点の御指摘があったが、確かにそういう面はある。大いにPRしろということでけれどPR面にいい方法がありましたら具体的にお教えいただければありがたい。

○　仕事と余暇に対する考え方

鈴木（講師）　大変むずかしい御質問ですが、それにお答えする前にさきほど発言させていただいたことの補足をちょっとさせていただきたいと思う。

実は人間には数多くの欲求があり、その中で現代の若い青少年の人たちが強く持っている欲求には二つある。一つは、とにかく意味のあることをしたいという意味を求める欲求もう一つは、自由に自分のやりたいことをやるという自由を求める欲求で、この二つの欲求は、本来からすれば、勤労の場で満たされていくことがいちばん望ましいと思う。松本先生のお話を伺っていても若い人たちは仕事の場で生きがいを求めたいという気持をもっているということですが、このような志向は若い人に強いと思う。しかし、現実の仕事の場というのは全体の中の歯車の一つにしかすぎないという感情や、あるいは自由さというようなことはほとんど与えられないことから、さきほどの二つの欲求も仕事の場では満たすことができないから余暇の場で満たそう。このように余暇を認識しているようで、私は問題だと考える。つまり、余暇は仕事に従属しているという考え方であって、私は余暇と仕事とは本来的には調和すべきものと思う。その意味でさきほどたとえば勤労青少年ホームを積極的に利用している人たちに仕事意識が旺盛であると申し上げましたが、意味を求める欲求と自由を求める欲求というのは仕事の場でも本来的に満たされていかなければいけないと思うし、同時にそれは余暇の場でも満たされなければいけない。したがって、余暇の場で二つの欲求を回復することは同時に仕事においても充実した生き方が出来るということになろうかと思う。この観点から余暇は仕事に従属するとの考え方を多くもっている中小企業の経営者の人たちの意識の変革を求めるような施策になり、PRが必要であると申したのでした。

具体的には勤労青少年ホームの利用者と、利用者の勤務しているようなところの経営者――利用者と経営者は同一企業内でない方がよい――と、たとえば勤労青少年ホームの中でホームの運営の仕方やあるいは余暇のあり方、仕事のあり方といったことについて協議したり話し合いをしたりする場を作ることにより、経営者の余暇というものに対する考え方を変革させる必要があるのではないか。そのためのPRが必要ではないだろうか。つまりそのためには少なくとも勤労青少年ホーム

として余暇の問題を主題にしていくことも必要でしょう。また、同時に当然労働の問題も重要な一つの課題としてとらえる。つまり余暇の問題と労働の問題をこみにしてホームの利用者と指導員と企業の経営者との三者の話し合いが行なわれるような機会をつくることが必要だ。次に思いつきに近いのですが、ホームの卒業生、の参画の場というか、経営者と利用者の間のいわばみぞを埋める媒体として必要ではないかと考える。

加藤（司会）鈴木先生のお話を伺いながら考えたのですが、先日読売新聞社と西ドイツ大使館の共催で日独青年会議を三日間にわたつて開いた。その中で余暇の問題が一つの柱になつていて、ドイツの青少年研究所の若い職員がレポートを報告した。ドイツ語では余暇のことを自由時間、フライツアイトといい、自由時間すなわちフライツアイトは労働の対極にあるもので、労働に対する生産面を高めるとか疲労を回復するというような意味をもつていた。しかし彼の報告によるといまドイツの青年たちが問題にしているのは、労働をするから余暇があるというのではなく、余暇が先なんだという考え方を持ちはじめており、この新しい自由時間のことをドイツ語でフライ・エ・ツアイト、「自由な時間」とよびフライツアイトと区別して使っているというようなことであつた。

この新しい考え方によると、労働者は自分の働きたい時に職場へ行き労働の対価を得るという形になり、いままでは拘束された労働時間から解放された後が自分の時間だつたけれども、これからの世の中はまず最初に自由な時間があつてその中で労働者は働く時間を自主的、主体的に決める時代になっていくというショッキングな話を聞いた。日本はいつごろからそのような考え方になるかわからないが、一つのお話として紹介しておこうと思う。

○　ホーム主催行事のあり方

小口（岡谷市勤労青少年ホーム）斉藤先生が、さきほどあてがいぶちのプログラムということについてお触れになりましたが、私どもは一つのプログラムを作るとき、アンケートをとつて一つの資料として行事を実施している。しかし若い人たちの紙へ書いたのと実際の行動というのがマッチしないという点があり、青年たちのいわんとするところはいつたいどこなんだ、どうすればいいかというジレンマみたいなものに陥る場合がある。こんな点についていい案がありましたならば具体的にお教えいただきたい。

斉藤（講師）私どももまつたく同じような経験をしばしばさせられている。一つはきわめて原則的なことですけれども、どういう形の質問をしたかということに一番大きい問題があると思う。クエッションネアを出して質問紙に答えを書いてもらつて意見をとりまとめるというのは、実は大変むずかしい作業だということを申し上げたい。特に年令の若い人たちほどお話しのあつたとおり大変たてまえ的な書き方をする傾向があり、なかなか本音を書かない。むしろ年長のほうが素直に思つていることをお書きになる。そこで質問のしかたに配慮するということ。それでもなおこのような問題は出てくるように思う。

さきほど私に与えられました課題はグループ活動でしたが、グループ活動と呼ばれるものをやや枠を広げて考えてみることがここでは必要ではなかろうか。いわゆるクラブを形成していくことのみがグループの活動ではないのでして、その基本にはさきほど申し上げましたような自発性と自律性を前提としたある新しい価値を創造していこうとする小集団の活動が考えられてきている。こういつた観点からたとえばアンケートをしますと集約的に要望が出てくる。これを実態化していくプロセスにアンケートに答えた青年諸君をどこまでも巻き込み、拘え込んで一緒にそのプログラムを作つていくことができないというところに、二つの問題があるように思う。実は意見

は聞いた、だからそのとおりにやつたというのでは紙一枚の差だけしかない。アンケートを作る段階から青少年諸君の参画を求めていくことが大変大事なことだと思われる。

川崎（加賀市勤労青少年ホーム）ホームの施設はいうまでもなく場所の提供だけであつてはならず、まして単に習をしているだけでもいけない。何かを与えなければならないことになりますが、この与えてやるということでは現代の彼らは受け取つてくれない。そこでこれは感謝というか満足しておる上でよりよきものを求めさせるという考え方でいきたいと思う。方法としては社会奉仕とか作業奉仕などはどうかと考えているが、私は社会教育課長兼務の館長ですので、この考え方についての先生方の御経験なり考え方をお教えいただきたい。

加藤（司会）斉藤先生がよろしいかと思います。どうぞ。

斉藤（講師）おつしやるとおり施設というのは単なる容れものでなく、そこに集まつてくる人たちに多くのサゼスションとか刺激とか材料とかを提供しながらプログラムそのものを提供していく責任が最終的にあろうかと思う。いまのご質問の内容はそういう中で特に社会奉仕のプログラムがどういう意味を持つか、というご趣旨でしたでしようか。

川崎（加賀市勤労青少年ホーム）不足の上から求めさせるというのではなしに、感謝の心から求めさせていくというようなプログラムを作つていきたいということです。

斉藤（講師）そのようなプログラムはたしかに大きな有効性を持つであろうとは思いますがいまおつしやつた感謝の心という言葉自体はやや一般論ですが、現代の若い人たちにとつてやや白けさせられる言葉であろうと思う。その言葉自体が若い人たちとのコミュニケーションをむしろ疎外していくのではないかというおそれすら他方では感じる。ただ私自身の経験から申しますと、館長さんがいまおつしやつたようなプログラムは、昨今私どもの団体においても大変盛んになつてきており、大学の紛争のいちばん激しかつた時期でも、大学生の会員でボランティアリーダーをしていた人たちの間に種々の活動がみられた。いくつかの事例を上げますと、一つのグループはむしろ感謝の心とは少し違うかも知れませんが世の中で自分たちが想像だにしなかつたような苦痛を担つて生きている人たちの存在に目を向け、あるグループは沖縄にあるライ療養所のために働く決意をし、もう四年ほどになりますが、一年間のうち休みを除く時期は社会福祉の学習グループを開いたり、いろいろなものを持ち寄つて地域社会のお母さんたちの手助けを得ながらバザーを開き資金を作り、夏休みにはライ療養所で労働奉仕をすることに喜びを見出しているグループがある。

このような傾向はいまから二十四、五年前に意外に日本の若い人たちの中では活発な仕事であつたように記憶している。特に国際ワークキャンプというような形態で戦争で被害を受けた国へ出かけていつて、その土地の青少年のために役立つ作業を肉体労働をもつて補つてくる、そして交流もしてくるというような働きがあつたのですが、最近またそれが大変活発になつてきていることに私どもはいま新しい希望を持つている。しかし、たびたびお話があつたように、現代の青年の欲求は非常に多様で、その表現もまた自ずと多様になつてくるだろう。そこで、社会奉仕だけがすべてというわけにはまいらないということを蛇足ではあるが付け加えさせていただきたい。

鈴木（講師）さきほどのご質問に「不足しているものを補うのではなく」というご発言がありましたが、若い人たちはとにかく意味のあることをしてみたいという気持が非常に強い。球技をやつたり友だちとレクリエーションに行くとかいうのではどうも意味が得られないということもあつて、そういう意味への欲求が満たされないという不足はあるのではないか。そうゆうものを満たすという社会奉仕活動について昨年研究調査した中から申し上げてみ

たい。それは企業のジュニアリーダー制度でこの制度が上手に運営されているところのジュアリーダーのやっていることの中に、地域の交通標識の整備、清掃活動といった地域に対する奉仕活動を積極的にやっており、一つの企業の中の余暇活動だけではなく、地域的なつながりを見せて活動しているところが案外活発であった。このことは感謝の気持ということもあるかもしれないが、私はむしろ意味を求める欲求が満たされない、それを補いたいというところに行動の源泉があると解釈したい。

中沢（阿倍野市勤労青少年ホーム）斉藤先生にお願いしたい。ホームは会員制ですが、その一人一人は顔見知りがない。従って、ホームとしてはいかにして利用者間のコミュニケイションを作ってやるかということが重要な問題となってくる。そのため月のホーム行事を組んだり、そのほか長期、短期の講座、講習あるいはグループの育成その指導、相談等の実施を通じて彼らの人間関係を作ってやろうと考え運営している。斉藤先生からホームは傾向として行事中心主義であるとの御指摘がありましたが、先生はホームの行事についてどのようなお考えをもっていらっしゃるのかお聞せ願いたい。

加藤（司会）斉藤先生お願いします。

斉藤（講師）さきほどお断わりしたように、ごく少数拝見させていただき、そのほかちょうだいした資料に基づく知識ですから、多くの誤った点があろうかと思う。ただ、なお今日ここでいろいろな方々のご質問やご意見など通して実情を伺っている中で、感じていることは、行事への利用者の参画を促すのが必ずしもまだ十分ではないのではなかろうか。つまり行事はホームの側で準備し自発的なグループ活動は利用者そのものがやっていくというところで、多少の切り分けがあるのではなかろうかという印象をもっている。ただいまの阿倍野ホームのお話は私どもが考えているような青少年のための施設としてはおそらく申し分のない見事な設定ですし、おそらくそのような利用の展開があろうかと思うが、どこまで利用者を参画せしめていくか私自身がホーム理解について多少まだ十分でないので中途半端な発言ではありますが――。

○　職員の勤務体制について

針金（能代勤労青少年ホーム）萩野先生に伺いたい。職員の勤務体制を二交替でしているようなお話しでしたが、これは一週間交替なのかどうか。休館日の場合の仕組をどのようにしているか。夜間超過勤務手当あるいは特別手当とかいうものを支給しているかどうか、この点お聞きしたい。

萩野（講師）まず勤務については、一週間交替ではなく、二日ないし三日ということで話し合いの上、一カ月のプログラムを前日中に作っている。休館日については実は私のところは、勤労青少年ホームと勤労青少年寮の二つを管理しており、寮には管理人がいるので職員は出勤しなくてすむ。特勤手当の関係は時間外手当ではなく特勤手当として月一五〇〇円と非常に少ない金額ですが支給している。この金額は今後真剣に検討していく必要があると思っている。

小口（岡谷市勤労青少年ホーム）萩野先生は、さきほど「指導員とか職員は、自分自身にやる気がなければだめだ」とおっしゃった。たしかに私どもに必要なことと思うが、たまたま私どもは、市長から辞令一本で配転されてきているというような事例が多い。従って性格的に向いている人ばかりが配置されているとは限らない。このような点についてたとえば労働省あたりが一つの基準なりあるいは資格なりというようなものを示すような考え方はないかどうか。

萩野（講師）われわれホームの職員として側面的ではあってもしなければならないことは、まず第一に、ホームの内容を充実させ地域に密着させるということ、次に今のことと関連

し、市町はじめ人事担当者にホームについて認識させるということ、これが非常に大事なことだと思う。すなわち、市長はじめ上層部に理解させるということ　率直にいつて紙一枚でわれわれは動くので、それについての直接の対応策というものはある筈がない。だからといつて労働省が指導性というような極限をもつべきではないと私は考える。なぜなら反つてホームの自主性がいろんな意味で失われると思うから。

渡辺（栃木市勤労青少年ホーム） 萩野館長にお聞きしたい。富士のホームは職員が六名ということで大変うらやましい限りですがその中、女子は八時から五時、男子二名が八時から五時、また一時から九時に男子二名というような勤務体制をひいているというお話ですが、一般的に青少年ホームの利用者の一番多いのは五時から九時の時間帯だと思う。いちばん忙しい時間帯を二人でしていくのに支障はないかということと、開館は朝九時とうかがいましたので併せて昼間の利用状況等についてもうかがいたい。

萩野（講師） 最初に利用の多い時間に二人ということ、これについては、私も悩みました。方法としては利用者の中にホームリーダー会があり、このホームリーダーをしつかりつかまえるということで補い二人で運営している。ホームリーダー会をしつかりつかまえるまでには三年かかつた。

昼間の利用の問題は、勤労青少年ホームは地域に密着したものでなければいけないということから午前中は近くの婦人グループに卓球クラブを作らせ、その人たちに利用させている。また、各企業がいろいろな研修会をもつていただくように、ホームのPRを兼ねてすすめている。

今泉（男鹿市勤労青少年ホーム） 私どもの方では現在、どうやつて勤務を交替するかということについて一所懸命です。

最初のころはホームの館長は専任でなければならないと聞いていましたが、秋田県では八館のホームのうち専任が二館であとの六館は兼務館長です。このような実態の中で指導者の役割はどうかということよりも、どうやつて指導者を作つていくかということに現在悩んでいる。これでいいのかどうか、いいはずはない。そのへんの職員体制、たとへばホーム指導者は何名もいなくてはならないかということをひとつどなたからでも願えれば幸いと思う。

加藤（司会） どなたがよろしいでしようか、萩野先生どうぞ。

萩野（講師） これはむずかしい問題で、私が答えていいやら悪いやらわからないのですが、ただ、ここではつきり申し上げられることは私はやはり専任の館長　ぜひほしい。われわれ三〇〇のホームの職員の切なる願いであり、これは労働省の方から強力に指導していただく以外にない。各市、県ならの会議、全国市長会等の機会に労働省のほうからぜひ強力に押してもらうこととしたい。私のホームは、事務職員五人ですがこれでも完全にやつていける自身は持てない。お答えになつたようなならないようなことでしたがそれぞれの県、市町村にも特殊事情があり、簡単に答えが出る問題ではないと思う。

今泉（男鹿市勤労青少年ホーム） いま全国にホームが三〇〇を越えております、その中で兼任の館長を置いているホームはどのくらいあるか、さしつかえなかつたら労働省の方からおこたえ願えませんか。

加藤（司会） 労働省の調べでは、全体の約四分の一が兼任の館長であるとのことです。

佐野（徳島市勤労青少年ホーム） 質問ではありませんがご参考になるかと思い、私のホームの実情をお話ししたい。、私は二代目の責任者で市の職員であり専任です。前任の館長までは館長以下全員六名が嘱託というか非常勤職員であつたのが現在は私一人が正規職員のほか、四名の指導員を含め五名はこれも

非常勤職員の嘱託です。勤務時間は非常勤職員なので管理人を除き四名の指導員のうち一名は一時から九時まで勤務し、二名は四時から九時までもう一人は朝の十時から五時、四時から九時までの隔日勤務にしている。開館は午后一時からで日曜日を休館としている。館長は朝八時半から五時までとなつているが九時まで勤務することが殆んどです。私には特勤手当は出ないが他の職員には超過勤務手当として大体給与の一一％程度支給されている。以上勤務については割合スムーズに行なわれている。人を得るということについてはいままでは学校の教員、あるいは市の社会教育等の面に勤務された退職者を市のほうから送り込んできたのが現状で、もちろんこれについては館長と相談の上「この人物は好ましくない」、「いや、この人物がいいだろう」ということで得られていた。しかし最近、若い方で熱意をもつた方がぼつぼつあらわれた、われわれのほうの選考が非常にしやすくなつた。したがつて紙切一枚で来るというようなことはなくなり、こちらが望んでいる人を得られる。ただ悩みとしては非常勤職員であるため非常に給与が安い。これについてはわれわれもこれから努力したい。現在職員の年令構成は女子二〇代、三〇代各一名、男子は四〇代三名私は六一才で、理想的な年令構成になつている。若い方については市の職員として登用されるよう要求している。

加藤（司会）どうもありがとうございました。

森（古川市勤労青少年ホーム）各ホームの方から勤務体制に関する問題について種々話が出ておりましたが参考までに私のホームの実情を申し上げたい。私どもの方は職員が四人のうち用務員が一人です。午後二時から夜九時半まで開館しており、用務員は朝八時半から五時まで、あと女子職員を含めて三名は毎日午後二時から九時半まで勤務している。夜間勤務はつらいのですが、利用者一人一人の顔を覚えていなければいろんなことも出来ない。私どものホームよりもつと少ない職員でやつておられるホームもあると思いますが。

加藤（司会）これは青少年余暇施設全般の問題で、利用者本位の施設になるためには、どうしても利用者の集中する時間にたくさんの職員をはりつけておきたい。しかし利用者の要求に全面的に応じると職員の方がまいつてしまう。どのような施設もお悩をお持ちだと思う。昨年だつたと思いますが、やはりこのシンポジウムで埼玉県のホームに働いている若い人が発言され、毎日夜まで勤務したために変わり者として扱われたり、そのために体をこわされたというような話もされていた。私は職員に犠牲を強いるような形の勤務体制で利用者に満足を与えるような施設というのは、長続きしない。そういう犠牲的精神、熱意は評価すべきだけれども、そのような人がたくさんいるわけでもないと思う。なにかいい解決方法をお持の方がありましたらお聞かせいただきたい。

中沢（阿倍野市勤労青少年ホーム）私のほうは職員が八名いる。そのうち専任が五名、あと三名は非常勤で、利用者の多くなる時間に非常勤を入れている。週三〇時間の非常勤二名、二〇時間の非常勤一名ということでやつている。したがつて夜の利用者の多いときには指導員が十分にあるという体制にある。

○　遊びと学習について

梶（堀野市勤労青少年ホーム）江橋先生にお伺いしたい。日本では遊びということについてわからないことが多い。これから余暇の問題を理論的に考えていくときに日本の遊びとはなんだろうかなと迷う。学校教育活動であるなら教えるということで遊びの方向付けも出来るが、経験主義的なやけどをしてみなければ熱いこともわからないというような未熟な人たちは余暇も、結局遊びというようなものが主体になつていくように思う。遊びを抜いた勤労青少年ホームの活動はどうゆうものな

のか、遊びということについてわれわれはどのような考え方を持つたらいいのだろうか。教えていただきたい。

加藤（司会）江橋先生、これは大変むずかしい遊びの哲学、についてのご質問と思いますが、

江橋（講師）ほんとうにむずかしいご質問で直接のお答えになるかどうかわからないけれど、さきほど、いまの日本の特に若い方々の余暇のすごし方がやや遊び志向であると申したのは、余暇の過し方というのはけっして遊ぶことだけではないんだという前提の上にたつたわけで昔から「よく学び、よく遊べ」といわれているように私は遊ばないのがいいとは思わない。よい遊びあるいはよりよい遊びというのはなんなのかということを考えることが、余暇の過し方として一つあるのではなかろうか。ですから、ただ単なる暇つぶしではなくてよりよい余暇の過し方、あるいはよりよい余暇の遊び方はいったいなんなのかということでいろいろ活動が展開されているものと思われる。

次に学習というのはけっして知的学習ではなく、おそらくみなさま方のほうでもおやりになっているお茶、お花、書道というような学習活動をいい、一方では楽しみながら一方では技を高め、そこにはやはり学びがある。これはまさに遊びと学びが統一された形で展開されているものと思う。余暇の過し方の側面としてほかに、仲間とともに過すというような集団での生活というのがあり、これにも遊びと学びの両方の要素がある。仲間とともに楽しむという一つの遊びの要素と、仲間とともに相互に遊びながらその過程で相互の交渉過程というか、相互に刺激し合う過程というのはまさにこれは自らが他から学んでいくという過程であつて、これも遊びと学びと区別すべきことではなく、余暇の過ごし方の中で一つにたつている。遊びということの中でただ、ひとつ大事にしなければならないのはさきほどからいろいろお話が出ていたように、自由さであるとか自発性、自らが選択して自らの責任において行うことを生かしながらよりよい自らの遊びをどう開拓していくのかというところに余暇指導の大きな役割があると思う。以上遊びの哲学などということではなく私の個人的な思いつきでしたがお許しいただきたい。

加藤（司会）江橋先生も遊びの大変お好きな先生でボーリングの手ほどきを私は江橋先生からさしていただきよく一緒に遊んでいる。ボーリングとかパチンコ、マージャンというのはよりよい遊びなのかどうかその点をお伺いしたい。

江橋（講師）結局そこにもよりよい遊び方がある。たとへばパチンコでも――。

加藤（司会）景品をとることを目的に――。

江橋（講師）じゃなくて、そこに遊び方がある。活動の様式でもつてすぐいい、悪いを決めることも可能ですがむしろその遊び方、接し方ということの方が大事だと思う。その遊びに接している本人自体の気持とか心あるいは意欲などを併せて考えてみないと簡単にいい遊びなのか悪い遊びなのかの判断はつかない。

ですから、充足感、満足感を本当にもち、なおパチンコで生きがいを感じている方があれば、これはまさによい遊びではないかと私は思う。

梶（据野市勤労青少年ホーム）そのことについては結局指導者がどのように考えるかということが非常に重大な問題になるだろうと思う。遊びを上手にしているのか下手にやつているのか現象的にはわからない。昔から道楽とか趣味を若い時に一所懸命やり、それが終生の生きがいになつたというようなこともある。しかし、一人の人間がこれから伸びていくというような時に単に本人の自発性によるものなのでと片付けられないのではないか。また指導者の技能にも限界があるなどから遊びについて伺つたのでした。かさねて、指導

者は遊びをどういうふうに考えたらいい伺いたい。

○余暇における指導者の役割

江橋（講師）余暇の過ごし方というのは個人の自発性とか自主性というのが第一で、それを一つの契機としあるいは生かしながらどのように指導者が適切な指導や助言を与えるのか、あるいは仲間づくりに対して助言を与えていくのかということで、要は本人の活動に対して意欲というものを大事にしたいと私は思う。余暇の過し方というのは他人様がいろいろと外側から口を出して、「それはよくないからこれをしろ」と言つても、おそらくその一言で今日の青年はすぐ遠ざかつてしまう。従つて一つの自発性なり自らの意欲というものを契機にしながら、ともに切り拓いていくところに指導者の役割があるのではなかろうか。

もう一つはどのようにして成長、発育の過程にある青少年に対して適切な刺激を与えうるかということが問題になつてくる。たとえば、どうゆう運動をすることがその青年にとつて健康に寄与するのか。精神的な糧をもつてもらう場合でも、いかなる糧を蓄えていくことが一人一人の青少年にとつてプラスになるのかということ、ここに指導者の判断が必要になる。だからといつてそれを上から押しつけるということではなく、青少年一人一人を理解しながらどう共に分かち持つことが可能なのかということを余暇指導の場合に考えないと、いけないのではないかと考える。

加藤（司会）対象は違うけれども、最近の小学生は遊びを知らなくなつたということから東京あたりの学校で遊びの時間というものを正課の時間に組み込んでいるところがあつて、遊びの時間に先生は一所懸命子供を遊ばす。ところが遊びの時間が終つた途端子供たちは「さあ遊ぼう」と言うそうです。ということは、先生は一所懸命遊ばしたつもりでも遊ばされた子供は本当には遊んでいなかつた。そのへんに私は遊びの本質というようなものがあるのではないかと思う。さきほど、江橋先生がおつしやつた自主性とか自発性とか自分の意欲から考え出した遊びが本当の遊びであつて、やつぱり指導された遊びというのは青少年にとつても本当の遊びではないのではないのかというようなことをいを感じている。

森（古川市勤労青少年ホーム）人間は生来ギャンブルを好む傾向がある。昔は子供でもビー玉とかめんこをよくやつたものですが……。それでひとつお聞きしたいと思うのですがホーム内で年一回位サークル対抗のマージャン大会をやることはどうだろうか。またやつているホームがあるかどうか。若者の本当に好むものをやらせることが出来ないのが公共施設であるホームの難しい点であると思うのですが――。

加藤（司会）いまのご質問は、青年はギャンブルが好きだから年一回位ホームの中でグループ対抗のマージャン大会ぐらいはやつてもいいのではないかということのようですが――。ご出席のみなさんのホームでそのようなことをしておられるところがあつたら挙手をしていただきたい――。大分手があがつていますが遠慮している方がいらつしやるんではないでしようか。いまごらんになつたように大体七か所ぐらいあるようです。

○　現代青少年のいいところ

矢島（岡崎市勤労青少年ホーム）若い人たちを指導するにはその自主性を尊重せよとどなたかがご発言になつたと思うのですが現代青年のよいところにどうゆうものがあるかということを私どもはよくつかみ、その芽を伸ばすような指導に努めたいと思う。現代勤労青少年のこういう点が、昔と比べいいのではないかというようなことが諸先生の御経験の中にありましたらお聞かせ願いたい。

加藤（司会）現代青年のいいところは何か。講師の先生方から御発言願いたいというこ

となんですが、並んでいる順に一つづつでもあげていただきましょうか。

申しわけございませんが時間も大分切迫しており、現代青年のいいところというのをいくつかあげていただきこのご発言を最後にあと味の大変いいところで会を閉じたいと思う。よろしいでしょうか。ご協力願います。それでは江橋先生から。

江橋（講師）さきほどもお話ししましたように現代青年といわず、いつの時代でも青年は大変いい、大変純真です。ですから私も青年とともに生活しているわけでして、純真であるとか、積極さがあるとか探究心が旺盛であるとか、そのようなよい面をもつているということを十分認識した上で私はさきほどの問題点をなぜあのような面が出てきたかといえば日本の余暇環境は青年たちが求めたくても求めえないような状況にあり、やむをえずマージャン、パチンコ、ボーリングでうさをはらしているという側面がみられ、日本の余暇環境というものはけっして今日の働く青少年にとつて満足のいけるような環境にない、そういう環境の中に流されない主体的、自主的な青年というものが育つてほしいと願う。青年をわれわれが頼りにしていないからということではなく、青年とともにお互いに満足していけるようなそして生きがいを感じえるような余暇生活はなんなのかということをお互いに作り出していくためにも、今日の問題点を指摘し合い、それをどう克服していくかということを考えていつたらいいのではないかということで申し上げたわけでした。

松本（講師）端的に感じていることは、かつての日本人のように組織とか体制への埋没という面に対する抵抗性が非常に強い。そのことが個性を生かす欲求につながり、かつそれが人生の欲求の最高次のものをねらう体制を作り、そこに意味を考えてくる。そのことが生きることへの意味の追求、具体的な問題でいえば、さきほど遊びの哲学について出ていたけれども、遊び方についての意味を問うてくる。私は青少年に大いに期待していいと考えている。

斉藤（講師）重複しないように申し上げた方がよろしいかと思うが、私自身は青少年の仕事に生涯をかけるつもりでこの仕事にはいつている。ですから一〇〇％の信頼を青少年において生きている人間です。ただ一、二の点を現代という点に即して申し上げるなら、すでに先生方もおつしやつたことですがまずきわめて正常な批判能力を具えた青年が増えており、私どもは高く評価しなければならない。第二に、かつての青年よりはるかに広い視野でものを見ることが出来るようになつてきている。これは十分な情報が与えられているからということもあるが別の角度からみると地球が小さくなつてきたということなのかもしれない。

鈴木（講師）あとになればなる程ど申し上げることがなくなつてしまう。戦後のホームルーム教育の貢献ではないかと思うが今の青少年たちはグループを形造るとそこにリーダーが必らずすぐみつかるということを感じている。企業で働いている中高年の方々と話し合う機会に司会者を決めようと思つてもゆずりあつてなかなか決まらない。ところが若い人たちはすぐ「私がやります」と積極性がありリーダーが決まる。これは非常にすばらしいことだと思う。若い人たちは何んでもやらせれば出来る、若い人たちを信頼するのがまず大切なことと思う。

萩野（講師）私は何も申し上げることがなくなつてしまつたようですが、ただ感じることは、非常に積極性と頭の切換えが早いということ。最後に勤労青少年ホームで昼も夜も青年たちと楽しく仕事をしているということを申し上げたい。

加藤（司会）青少年をまな板にのせるような会合では、青少年の悪いところばかりあげつらえ、これじゃ日本が滅びてしまうというような話しになるのですが、今日は最後に「

日本の青年は大変たくましく、立派な青年が育ちつつある」と大変明るいムードの中で散会することが出来ますことは司会者として大変喜びとするところです。みなさん今日のシンポジウムのご発言の内容をあすからの青少年指導その他に生かして、さらに立派な日本の青少年を作つてよりよい日本を作つていただくよう努力していただきたいと思う。長い時間ありがとうございました。（拍手）